

漂着物 アート 展 2018

平成30年 **6.7**木 **7.1**日
9:00-17:00 ー 休園日:火曜日

会場: 氷見市海浜植物園
1階特設ギャラリー **入場無料**

プロデュース/富山大学芸術文化学部 後藤 敏伸

[主催] (一財)氷見市花と緑のまちづくり協会
(公財)環日本海環境協力センター

[後援] 富山県、富山大学芸術文化学部、(公財)とやま環境財団
UNEP NOWPAP

[協力・作品制作] 富山大学芸術文化学部



[Instagramの世界環境デーのページ]

BEAT
PLASTIC
POLLUTION

WORLD
ENVIRONMENT
DAY

UN
environment



[Aqua'marry'ne]
川島 夢結希(富山大学)
2017年 最優秀賞

富山大学芸術文化学部生 作品一覧

最優秀賞



生命の船旅

渡辺 凧砂

人の人生は、壮大で華やかである。長い長い苦難を乗り越え、辿り着く先は何処なのだろうか。

青と黄色で着色した浮きで、溢れ出る生命のエネルギーを、土台部分の複雑に組み合わせさせた木で、人生の苦難を表した。人は不安定な世の中を、力強く輝き、もがき生きている。鮮やかな浮きが目に留まっていたら幸いです。

優秀賞



「願いの鐘」

井上 剛志

私は海の無い県に住んでいたのに、海洋汚染がここまで深刻だとは全く想像していませんでした。想像していたより海は叫んでいました。この叫びをどうにか形にしてあげようという気持ちでこの作品を制作しました。

これは海で拾ったゴミから作った「叫びの鐘」です。捨てられたゴミ達の奏でる悲しい音色を聴いて今一度環境について考えて頂ければ幸いです。

優秀賞



忘れ去られた塔

古谷 隆昌

海岸の砂浜に流れ着いた靴、何かの部品、ガラス片。彼らはかつて各々の役割を持っていた。人の役に立つために生まれてきた彼らはいつの日か人に忘れられ、海を越えて辿り着いた遠い地で塔を形成した。今や塔は海辺の生物たちの住処となり、人知れずひっそりとそびえ立っている。

優秀賞



音の海を泳いで

村上 藍子

さざ波に溶けゆくリズムに身を任せメロディーを奏でる
揺れるリズム、漂う音色、押し返す波みたい
声が音が海を伝って彼方へ ともに鳴り響く
どこまでも続く青の向こう、波に任せて連れていけ
音に乗って波に乗って遊泳、もっといいところへ
海にするり染み込む 音の海飛び込み、かき鳴らせ
なれるだろうか
私が憧れた、あの海で一番のギターヒーローに

奨励賞



魔法の城

漂流物に魔法をかけました。

奨励賞



時間を運ぶ船

浦 真斗花

海岸に落ちていた浸食で角が取れたガラス、シーグラスをもとに着想した。海岸に落ちているシーグラスは波に乗って浸食されて流れ着いているので、ある意味自然にできたものでありとても美しく見える。しかし、もとは人間が廃棄した瓶であって海にゴミがばらまかれている事を示しており、皮肉な存在に感じられた。そして流れ着いたガラスの破片が木の枝の船で運ばれているイメージで制作した。

奨励賞



奨励賞



番人

齊藤 朱里

漂着ゴミから生まれたこのフクロウは、朝はもちろん、夜でも人間の行動を見張っています。

この作品を見て、環境について自分の行動を見つめ直してもらいたいという意図を込めて作りました。

想像

得能 真倫

浜辺で見つけた木やヒモで遊び場を作りました。これは階段かな、これは展望台かな、と楽しくイメージを膨らませていただきたいです。そしてその想像力で、私達の生活と漂着物を繋ぎ合わせてみてください。ここにある漂着物は、川でうっかり落としたゴミかもしれません。もしくは風の強い日に飛ばされた生活雑貨かも。

この問題は、私達にとって意外と身近なものかもしれません。漂着物というゴミを減らすために、何をすべきでしょうか。何ができるでしょうか。

奨励賞



水葬

栩田 優希

海を漂ってきた、付喪神の水子の棺です。

奨励賞



灯台

橋野 菜々花

私の中で、灯台は“海を見守る母”のようなイメージがある。灯台は建てられた日から毎日ずっと、静かな海の側にどっしりと構えている。

穏やかで生き物たちを優しく包み込むような海、激しく荒れる海、人々で賑わう海、ゴミによって傷つけられた悲しい海・・・

様々な海の表情や歴史を一番近くで見守る存在。そんな灯台が見守るこれからの海はどんな歴史を刻んでいくのだろうか。



未知の道

石原 美希

地球儀とコンパスをイメージした。まだ小さいとき、地球儀をくるくるとまわして世界を飛び回る夢を見た。はじめて日本人が地球儀を見たとき、世界をどのように感じたのだろうか。少なくとも昔も今も人は未知の世界に憧れを抱く。知りたいと思う。だからこそ、新しい一歩を踏み出す。道は歩いたところにあるものという。これより進むは未知の道。私の道。



絶海博士

市川 正稀

海沿いの都市には工場が乱立していると思います。高岡にも中越パルプなど多数の工場が立ち並んでいます。戦後、工業の発展とともに輸入も増え、工場など真新しい建築物が立ち並んだ時代であったでしょう。そんな過去の真新しかった工場群と現代の風化した工場群との時間の変遷を、遠い遠い海の向こうから流れ着いてきた廃棄物の中に見出し、まるで今にも物語が始まりそうなゴミの工場の城を築きました。



未来への選択

今西 裕乃

“未来は変えられる”

私たちの目の前には数多くの選択肢が存在する。

どの選択肢を選ぶかによって未来は変化していく。

小さな選択でも大きく未来を変えることもある。

良くも悪くも多くの可能性が存在する人生を自分らしく、自分自身で選択し、未来を築いていきたい……。



花の生きる場所

梅村 歩実

花は、人から人への贈り物というかたちで癒しを運ぶことができます。しかし、その贈り物にもたらされる癒しは贈る側の気持ちと迎え入れる側の気持ちが揃ってはじめて表れるのです。となると、花は人間に依存してはじめて癒しを運ぶ贈り物としての役割を担うことができることとなります。この作品では、周りの環境に左右されずに、自らの意志で誰かのために咲こうとする花の姿を表現しました。じっくり見るような作品ではありません。でも、いつか花を見かけたときに、花のもつ意思や、それを取り巻く環境を再認識しそれらについてほんの少し考えてみてほしいと思います。



海に出たもの

川寄 菜々子

海辺には、たくさんの落し物があります。それらは誰かのなくしもの、あるいは必要とされなくなったもの。

海辺では誰かに見つけてもらおうのを待っている小さな欠片たちがあります。

海に流され、砕けたものや削れたものの一部がまた陸に戻ってくるのです。

私はこうした海を旅してきたものたちに強く惹かれることがあります。

なぜならそこにはちいさな記憶と歴史が垣間見えるからです。



小さな一歩

北島 夕愛

私は、「足」をイメージした作品を制作しました。人間の足であるのか、動物の足であるのかは、私の中では決めていません。何者かの「足」が踏み出そうとしているところから、「小さな一歩」というタイトルをつけました。不安定な足に、色々なものを纏わりつけて、「一歩」を踏み出すときの不安をイメージしました。また、肝心の「足」の部分は、力強く見えるよう太い気を使って表現しました。「一歩」を踏み出すときは、誰にでも何かしらの不安があるのではないかと思います。その不安と戦いながら踏み出す、「小さな一歩」が大切であると考え、この作品を制作しました。



たけ～波

桑原 慎也

波は押し寄せる。ザザザと音を立てて動く。波に捕らわれてしまえば、ゆらりゆらりと漂うしかない。それはまるで、行く先の分からないまま恐ろしい生き物の背中に乗っているようだ。やがて私たちは、なすすべもなく波に揉まれて、バラバラになり、また一つになっていく。



深海の音

小杉 日奈子

形の様々な流木。どこから来たのか。どれ程の時間流れここに辿り着いたのか、現在の形となったのか。私にはわからない。わからないけれど、それらを見つめていると、海の音が聴こえてくる。静寂の中、柔らかく響く海の音。そんな音が、この作品を通しあなたにも聴こえていたら。



海月

新京 芽耶

色とりどりの海月は海の中を浮遊して生活している。

その姿は美しく、今にも海に溶けていきそうだ。

ゆらゆら揺れる海月の足には毒があるのに愛される。

海に浮かぶ漂流物も海月みたいだったら。



癒

高橋 美結

真夜中、当てもなく彷徨よい、誰も知らない間に海へと流れ着いて、早朝に姿を現す。そんな私の中のもの悲しい漂着物のイメージを、日常に疲れた女性と重ねて制作をしました。真夜中に女性が気分転換に海まで足を運び、波の音や潮の匂いに包まれる。これによって、ぽっかりと空いた心が満たされ、癒されていく様子を、ありきたりな日常を表す日用品だらけの外側から、段々と内側にかけて海を連想する色やモノを増やして隙間を埋めていくことによって表現しました。日用品に絡みつ়くロープは日常のいざこざを表しています。全体の形は歪なハート型にし、女性のささくれ立った心表現しました。



Hypnosis

竹内 かな

海を漂っているモノたちは、その長い長い時間を過ごしながら何を考えているのだろうか。

陸での懐かしい日々か、流れ着く先への不安か、はたまた未来への想いを馳せているのだろうか。



生命の逆転

中島 新

海岸や砂浜に打ち捨てられた、本来ならもう道具としては機能しない、謂わば「死んだ」といえるような紐や材木やプラスチック等を複雑に組み合わせることで、新たな一つの生き物を創造していくという過程を、生と死を逆転した作品として作成しました。初めは変哲のない木片等が、集まることで形を成していくのが非常に楽しく、夢中で作成しました。



見つめ直す

長谷川 七彩

オフシーズンの海へ出かけたことがありますか。そこはいつも見慣れた綺麗な海ではなく、ゴミのたまり場となっています。そのゴミは外国から流れてきたのではなく、実は国内、さらにはその地域のゴミであることが多いのです。しかもその大半はプラスチックごみです。私たちがなんとなく出してしまったゴミによって、人だけでなく動物にも危害が出ています。海や自然を大切にするために、私たちはゴミをなくさなければいけません。ポイ捨てしないことはもちろん、うっかりゴミを飛ばされないようにすることが肝心です。

この作品で私は、人間が自分で出したゴミの罠に引っかかるという間抜けな様子を、長靴に見立てて表しました。自分の行いは必ずどこかで影響しています。これが自分自身の行動を見直すきっかけになればと思います。



海に住むこどもの宝物

古田 恵理奈

浜辺で素材収集をしていると、様々な形状や材質のロープ類が漂着していることに気づきました。色合い、縛られた跡、ほつれなど様々な特徴を持っています。このロープは何に使われていたのだろうと考えているうちに多くのロープを集めていました。これらの他にどうして漂着してしまったのか不可解なものあり、どこか特別なものに感じられました。童心に帰ったようなこの感覚を作品に取り入れたいと思い、見つけた珍しいものが流れていかないように網を作って繋いでおくこどもの宝物を制作しました。このパーツは何に使われていたのだろうと考えながら見てください。



Fly in the sea

隠岐 まこ

海の妖精は羽にゴミが絡まってしまい、重くて飛べないでいる。それでも飛ぼうとしている。



見出す

堀田 野乃夏

漂着物を拾いに行った日はとても天気が良かったです。太陽の光を浴びて、砂浜の中で白いものや金属などが宝物の様にキラキラと光っていました。

そして、わたしが見つけた宝物たちを、わたしのルールで、一つ一つ四角の中に並べました。この作品を見た人にも何かを見出してもらいたいです。



花束を贈る

前田 綾香

私はこの作品で流れ着いた漂流物をあえて花束という綺麗なモチーフで表現しようと思い作品を制作しました。ボールや木で土台を作りお菓子の包み紙や電球、ペットボトル、貝殻などで装飾しました。どれも私たちが生活するうえで出てしまう身近なごみですが組み合わせ形を変えることで別の表現ができます。この作品は流れ着いた漂流物を一つの作品にして「送り出す」という意味も込めたためこのタイトルにしました。



Cry for Reform

増川 夕真

海から這い上がるひとつの暗い影
私たちにこの現状を訴えようとしているのか

海は美しいところ。
海は楽しいところ。
そんな当然のように感じていた事実が近い将来変わってしまうかもしれない

海は美しいところ。
海は楽しいところ。
私たちのずっと先の子孫にとっても永遠にそんな「場」であってほしい



栄枯

松尾 幸乃

一度は「枯れてしまった」木々たち。もう一度、あの頃の姿、「栄えていた」姿には戻れないのでしょうか。あらゆるものには、いつか終わりがくるものです。しかし心は、魂は、あり続ける限り生きていくことができます。



RAILWAY

松本 葉奈

波が穏やかな海を電車がゆっくり進んでいくイメージで作りました。



流れ着いた売り子

湊屋 知範

木に縄やナイロンの紐を巻き付け、硬い結び目をいくつも作ることで漂着物と人間との結びつきを表現したいと思い制作した。生きていく中で切り離すことのできない自然との関わり。太い縄や切れそうな細い紐を組み合わせて、複雑に絡まっている姿を意識して制作した。また所々に色のついた紐も編み込んだ。



離れない

森岡 志帆

いつも海を漂っている少年は海で集めた商品を売るために今日この日のために海岸に上がってきた。どこにでもあるようでどこにもないものを是非買ってほしい。



硝子の枝

吉崎 有美

自然物が人工物によって修繕されていく様をイメージして作りました。それは痛々しいような、綺麗なような、どちらにも見えるような。人によって作品の雰囲気違って見えたらいいなと思います。



漂着人形

吉野 瑞穂

材料を集めに行く前は捨てられた怨念のような怖いものを作ろうと思っていたがコンビニやスーパーでよく見る食品や飲み物の袋を拾ったら元々は愛されるものだったのだから怖がられるよりも綺麗と思われ、癒されるようなものを作ろうと考え直した。カラフルなフィルムやパーツで華やかな見た目になるようにした。



Show time!

渡辺 陽子

海を漂い浜に着いたごみたちは、私たちに
出会わなければずっとごみのまま
だったと思います。私たちに会ったこ
とで、ごみではなく作品として生まれ変
わることができた、という喜びのショーを
している様子を表現しました。

漂着物 アート展 2018

県内をはじめ国内の海岸に流れ着く多くの漂着物（漂着ごみ）、そして、日本国内からも流れ出ていくたくさんのごみ（漂流ごみ）… きれいな海岸の景色を損なうだけでなく、海に暮らす生き物や漁業への影響も心配されています。

こうした海洋ごみのほとんどが身近な生活ごみであることを、皆さんご存じでしたか？ 私たちは、知らず知らずのうちに大切な海を汚しているのです。きれいな海を将来に残していくためには、私たち一人ひとりがこのことを理解し、身近なごみをきちんと始末するなどの取組みをすぐに始めることが必要です。

このようなことから、次の時代を担う青年芸術家が海岸漂着物を利用して制作したアート作品を展示する「漂着物アート展 2018」を開催いたします。

このアート展をきっかけとして、私たちの大切な海を守るために何をすべきか考え、みんなで行動してみませんか。



「波乗り」高橋 紗綾(富山大学)
2017年 優秀賞



「再生の火」佐渡 涼子・若林 有那(富山大学)
2017年 優秀賞



「海星のドレス」森田 結香(富山大学)
2017年 優秀賞

氷見市立窪小学校4年生の作品も展示します (6/13 水 - 7/1 日)



「古い家の中には、たからばこ!!!」
辻井杏奈・前澤優衣・西尾晴菜・七瀬遥菜・田中莉緒
2017年 金賞



「主人をまつ犬」
東海翠穂・北端穂・竹田涼香
2017年 銀賞



「ベッドでぐっすりおひるね」
糸織華
2017年 銀賞



「漂着ロケット」
杉木仁哉・大森柊弥・伊藤光樹・森大河・大谷内悠雅
2017年 銀賞

展示会場



交通のご案内

○JR 氷見線島尾駅下車、徒歩で約15分

○能越自動車道 氷見I.C.から約10分 高岡北I.C.から約15分

お問い合わせ先



氷見市海浜植物園
富山県氷見市柳田 3583
TEL0766-91-0100



(公財)環日本海環境協力センター
富山県富山市牛島新町 5-5
TEL076-445-1571